

【創造魔法】を覚えて、

万能で最強に

なりました。

sozomaho wo oboete banno
de saikyo ni narimashita.



Author

久乃川あずき

Kunokawa Azuki

Illustration

東上文



主な登場人物



水沢優樹

異世界に転移した
七池高校二年A組の一人。
怪我を理由にクラスから
追放されるが、
偶然『創造魔法』を
手に入れたことで
運命が大きく
変わっていく。

北野宗一

七池高校二年A組
の委員長。
異世界に転移した後も
クラスをまとめている。

比留川四郎

七池高校二年A組
の一人で、
ヤンキーグループの
太鼓持ち。

プリム

「白薔薇の団」所属の
Sランク冒険者。
「神弓のプリム」と
呼ばれるほどの
弓の名手。

リルミル

特級錬金術師の
ハーフェルプ。
「白薔薇の団」の
リーダーを務める。

クロ

猫の獣人で、
「神速の暗黒戦士」の
異名をとる
Sランクの冒険者。

高崎由那

七池高校二年A組の一人。
優樹の幼馴染で、
クラスで、一、二を
争う美人。



七池高校 二年A組の生徒たち



氏 名 (五十音順)	出席番号
秋原拓也 《あきはらくや》	1
浅田瑞恵 《あさだみずえ》	2
甘枝胡桃 《あまえだくるみ》	4
笠松小次郎 《かさまつこじろう》	8
神代霧人 《かみしろきりと》	9
北野宗一 《きたのそういち》	11
久我山恵一 《くがやまけいいち》	14
黒崎大我 《くろさきたいが》	16
郷田力也 《ごうだりきや》	18
古賀恭一郎 《こがきょういちろう》	19
高崎由那 《たかさきゆな》	23
長島浩二 《ながしまこうじ》	25
羽岡百合香 《はねおかゆりか》	27
原口奈留美 《はらくちなるみ》	28
姫川エリナ 《ひめかわえりな》	29
比留川四郎 《ひるかわしろう》	30
松岡亜紀 《まつおかあき》	32
水沢優樹 《みずさわゆうき》	33
南千春 《みなみちはる》	34
宮部雪音 《みやべゆきね》	35
(他十五名は死亡)	

プロローグ

「出席番号三十三番、水沢優樹！ 君を七池高校から追放する」
 教壇に立つ委員長——北野宗一の言葉に僕の顔が強張った。
 「ど……どうして？」

「校則通りじゃないか」

宗一はメガネのブリッジに指先で触れる。

「僕たち二年A組の生徒が変な地震のせいで学校の敷地ごと異世界に転移してから、三ヶ月が過ぎた。その間に十五人のクラスメイトが死に、生き残ったのは僕たち二十人だ。そして、僕たちは生き残るために新たな校則を作った」

「それはわかってるけど……」

「ならば現実を直視したまえ。君の追放はホームルームで提案され、多数決で決まったんだ」

宗一は背後にある黒板に視線を向ける。

【賛成…18 反対…2】

「この票差なら、君も納得できるだろう？」

sozomaho wo oboete banno de
saikyo ni narimashita.

「できるわけないよ！」

僕はこぶしを固くしてイスから立ち上がる。しかし、右足に強い痛みを感じて、僕の上半身が揺らぐ。

「ほらほら。僕の言った通りだろ？」

ヤンキーグループの比留川四郎が嬉しそうに僕を指さす。

「こいつ、足の骨が折れてて、まともに歩けないんだよ。完全に役立たずさ」

「ひびが入ってるだけだから。杖を使えば歩けるし、食料探しもできるよ」

「だけど、その足じゃ、学校の敷地を出るのにも十分以上かかるよね？ 今の君より、小学生のほうが役に立つと思うよ」

「……ケガは時間が経てば治るから」

「それはどうかな。ここには医者もいないんだし、正確な判断はできないよ。歩けるようになっても走ることはいかないかもしれない。きひっ」

四郎が甲高い笑い声をあげる。

「僕の提案に賛成してくれたみんなに感謝だよ」

「四郎くん……」

「おっと。そんな目で見ないでくれよ。ホームルームでは誰だって意見を言えるんだからさ」

「その通りだ」

宗一がうなずく。

「君がケガで休んでいる三日間、僕たちは広大な森の中で必死に食料を集めていた。その食料を君は働きもせずに口にしたんだ」

「だって、だけど、僕だってケガをする前は、ちゃんと食料探しをやってたじゃないか。紫色のイチゴが生えている場所を見つけたのも僕だし」

「それは一ヶ月も前のことじゃないか。もともと、君の成果は男子の平均以下だったよ」

「そうだな。こいつは役に立たねえ」

ヤンキーグループのナンバー2、巨漢の郷田力也がそう言って机の上に足を投げ出した。

「男ならゴブリンの一匹ぐらい倒してみろよ。俺は、もう八匹倒したぜ」

その言葉に多くのクラスメイトたちが笑い出した。

「たしかに男子の中でゴ布林を殺してないのは優樹だけだよな」

「うん。アニメオタクの拓也だって、昨日、ゴ布林を殺ったぜ」

「女子の百合香さんや亜紀さんもゴ布林を殺したよね。男として恥ずかしくないのかな」

「まあ、しょうがないよな。ここは過酷な異世界だし、使えない奴は追放されるのが当然だ」

「そうよね。一人減れば、野草のスープの量の割りあても増やせるし」

「というわけだ」

クラスメイトたちの声が続いて、宗一が胸元で両手を合わせた。

「僕たちは危険な異世界で生き残るために協力しないといけない。お互いに名前で呼び合うようにしたのも仲間意識を強めるためだ。しかし、役立たずの君は仲間じゃないのさ」

「仲間……じゃない？」

「そうさ。僕だけじゃなく、みんながそう思ってる。君を追放するべきだと。霧人もそう思うだろう？」

「……まあね」

上位カーストグループのトップ、神代霧人が興味なさそうに整った唇を動かす。さらさらの髪に中性的な顔立ち。すらりとした体形で足は長い。優れているのは男性アイドルのような外見だけでなく、成績は学年一位でスポーツも万能だった。

「では、優樹の追放は確定……」

「待って！」

僕の隣にいた高崎由那がイスから立ち上がった。

由那は僕と同じ十七歳で、家が隣同士の幼馴染みだ。セミロングの黒髪に桜色の唇。左目の下には小さなほくろがある。スタイルもよく、男子の人気が高かった。

「優樹くんを追放するなんて、絶対にダメだよ！」

由那はクラスメイトたちを見回す。

「優樹くんは真面目に仕事してたよ。水くみの仕事も夜の見張りの仕事も」

「だが、ケガが治らないのなら、その仕事もできなくなる」

宗一が低い声で言った。

「僕だって、クラスメイトを追放なんてしたくない。でも、仕方がないんだ。これはみんなを守るための決断だから」

ウソだ！

僕は心の中で叫んだ。

たしかに僕はケガをしてる。だけど、その状態でもやれる仕事はある。それなのに僕を追放したのは、一部の男子が由那を狙ってるからだ。

委員長の宗一、僕の追放を提案した四郎、他にも由那を狙ってる男子は多い。上位カーストグループのお嬢様、姫川エリナと同じぐらい由那は人気があるから。

幼馴染みってことで、由那は僕によく話しかける。こぼれるような笑顔に鈴の音のような心地よい声。彼女と話している時、僕は何度も嫉妬の視線を向けられた。

僕を追放したほうが由那とつき合えるチャンスが増えるとも考えたんだろう。

そして、事前に女子とも話し合って、僕の追放を決めたんだ。

計算高い宗一のことだ。食料や仕事の配分で、女子にいい条件を出したのかもしれない。

自分の体が小刻みに震え出す。

「これから、僕一人で生きていけってこと？」

「そうなるな」

宗一が暗い声で答えた。

「まあ、一人なら食料を分配することもないし、悪いことばかりじゃないだろう。共同作業もなく自由に生きられるんだから」

「そーそー」

四郎が笑いながらうなづく。

「しょうがないって。大ケガをした君が悪いんだよ。自己責任ってやつさ」

「だよなーっ！」

他のクラスメイトたちも首を縦に動かした。

「ケガした優樹を助ける義理なんて、俺にはないし」

「他人に優しくできる世界じゃねえんだよ。ここはな」

「そうね。戦えない男なんて何の価値もないよ」

「というか、優樹さんの百倍役に立つ男子が何人もいるしね。いらない、いらない」

「霧人くんぐらいかつこよかったら、ずっと看病してあげてもよかったけど、優樹くんって外見も能力も普通だしさ」

宗一がパンパンと手を叩いた。

「では、優樹は今すぐ、学校の敷地から出て行ってもらう。君の私物は持っていて構わないが、学校の備品は持ち出し禁止だ」

「鉄の棒もダメなの？」

「当たり前だろ。あれは貴重な武器だからな」

呆れた顔で宗一は僕を見る。

「追放された以上、君はクラスメイトではなくなった。でも、一個人として、君が生き残ることを祈っているよ」

「優樹っ！ がんばれよー！」

野球部の長島浩二が笑いながら言った。

「みんなっ！ 一人で旅立つ優樹に拍手だ！」

クラスメイトたちが拍手を始めた。

パチパチパチパチパチパチ……。

教室中に広がる音が僕の心を傷つけていった。



四階建ての校舎を出ると、背後から由那が僕の腕を掴んだ。

「優樹くん！ 私も連れてって」

「え……？」

一瞬、由那の言葉が理解できなかった。

「由那さんも学校から出ていくってこと？」

「うん。優樹くんだけじゃ心配だから」

由那の瞳が夜の湖面のように揺らめく。

「二人なら、なんとかなるかもしれないし」

「それはダメだよ！」

僕は首を左右に動かす。

「学校の周りの森には危険なモンスターがいっぱいいる。ゴブリンだけじゃなくてオークやオーガもいるし、ドラゴンだっているかもしれない」

「それなら、なおさらだよ！ 優樹くんはケガしてるんだし、一人じゃ死んじゃうよ」

由那の声が震える。

「優樹くんが死んだら、私……」

「大丈夫だよ。隠れるのは得意だし、時間が経てばケガだって治るかもしれない。そしたら、学校に戻れると思うしね」

僕は笑顔を作った。

「由那さん、ありがとう」

「えっ？ ありがとうって？」

「君だけが僕の追放に反対してくれた。本当に嬉しかったよ」

「そんなの当たり前だよ。幼馴染みだしクラスメイトなんだから」

「クラスメイトか……」

その言葉が、なんだかおかしく思えた。

由那以外のクラスメイトは僕の追放に賛成した。僕の命なんて、なんとも思っただけだったんだ。

みんなのにやにやした顔が脳裏に浮かぶ。

悔しくて悲しくて、怒りで体が震える。

だけど、よかったこともある。あんな奴らと離れることができるんだから。そうさ。追放されたとしても死ぬことが決まったわけじゃない。絶対に……絶対に生き残ってやる！

追放されて五日目。

僕は一人で深い森の中をさまよっていた。

高さ二十メートルを超える木々が太陽の光をさえぎり、昼間なのに薄暗かった。緑色に発光する半透明のクラゲ——森クラゲ（みんなで名前を決めた）が、ふわふわと浮いている。

「森クラゲは食べられないからな」

僕は木の枝で作った杖をつきながら、歩き続ける。

水はなんとかあったけど、なかなか食べ物がみつからない。最近食べたものはアケビみたいな果物だけか。

「モンスターがいなければ、食料探しも楽になるのに」

そうつぶやきながら、額の汗をぬぐう。

走れない状態でモンスターに出会ったら、死は確実だ。まともに食事を取らなくても餓死するし、早くなんとかしないと。

その時、十数メートル先に長方形の板のようなものが見えた。

「んっ？ 何だろう？」

僕は警戒しながら板に近づいた。それは木製の扉だった。高さは二メートルぐらいで見たことの

ない文字が刻まれている。扉の後ろには何もなく、周囲には緑色の苔が広がっていた。

「何でこんなところに扉があるんだろう？」

僕は取っ手を握り、扉を開いた。

「え……？」

扉の中には六畳ほどの部屋があった。壁際に本棚が並んでいて、中央には木製の机が置かれている。

「あれ？ 何で？」

僕は首をかしげる。扉の後ろには何もないのに、開くと部屋がある。何だ、これ？

扉の中に入ると、机の上に二十センチぐらいの人形が横たわっていた。人形は木製で目の部分が丸くくり抜かれている。

「人形？」

その時、人形が上半身を起こして、顔を僕に向けた。

「やあ。僕の隠れ家よろこそ」

小学生の男の子のような声が人形から聞こえた。

「にっ、人形が……喋った？」

僕は口を大きく開いたまま、人形を見つめる。

日本語……いや、声が二重に聞こえる。脳が勝手に変換してるのか。

「まずは自己紹介かな。僕は残留思念だよ。創造魔法の創始者アコロンのね」

「創造魔法？」

「んっ？ アコロンの名前に驚かないんだね。もしかして、君……」

人形——アコロンは細長い腕を組んで、僕を見上げる。

「ああ、異界人か。なるほどね。別の世界じゃ、僕の名前も知られてないか」

「有名なんですか？」

「十歳の子供が知ってるぐらいはね。で、君は何でこんなところにいるの？」

「それは……」

僕はアコロンに自分の状況を説明した。



「へえーっ。大変だったね」

アコロンは包帯を巻いた僕の右足を見る。

「だけど、その程度のケガで仲間を見捨てるなんて、君の仲間は薄情で頭が悪いな」

「治せるんですか？」

「……君が代価を払えるのなら」

「代価って、僕が持つてるものは服と杖ぐらいしかないけど」

「うん。だから、仕事を引き受けてもらおうかな」

「仕事って？」

「魔王ゾルデスの討伐^{とうばつ}」

「まっ、魔王っ!？」

僕の声が大きくなった。

「待って！ 魔王なんて僕が倒せるわけないよ。強いんだよね？」

「まあね。この僕を殺したくらいだから」

「殺した？」

「そう。僕は四人の仲間といっしょにゾルデスと戦った。そして敗れた」

アコロンの声が沈んだ。

「ゾルデスは最強最悪の魔族だ。配下のモンスターも百万を超えていて、三年前に西の大国が滅ぼされたよ」

「そんな怪物を僕が倒せると思ってんの？」

「可能性はある。異界人である君ならね」

アコロンは小さな人形の手で僕を指さす。

「創造魔法はね、想像力と知識が重要なんだ。異界人の君なら、この世界の人々が知らない知識がたくさんある。君は僕を超える存在になれるかもしれない」

「だけど、創造魔法なんて使えないよ」

「すぐに使えるようになるさ。机の引き出しを開けてみて」

「う……うん」

引き出しを開けると、表紙に魔法陣が描かれた本と銀色の指輪が入っていた。指輪には見たことのない文字がびっしりと刻まれている。

「これは？」

「希少で高価な素材……スペシャルレア素材で作った世界に一つしかない本だ。触ってみなよ」

僕はおずおずと右手を伸ばして、本に触れた。

その瞬間――。

僕の脳内に見たことのない文字が大量に流れ込んできた。文字は日本語に変換され、それが創造魔法の情報だとわかった。

素材を消費して、物を創造する方法。創造した魔法を使用する方法。素材に関する知識。多くの情報が僕の脳内を駆け巡る。

触れていた本が消え、視界がぐるぐると回った。

「ぐっ……」

僕は頭を抱えてしやがみ込んだ。

「大丈夫。情報酔いはすぐに治るよ」

数秒後、アコロン言葉通りに視界が正常に戻った。

「さて、問題です。ケガを治す呪文に必要な素材は？」

「そんなの……あ……」



僕は大きく開いていた口を動かした。

『『夢月草』？』

「正解っ！」とアコロンは言った。

「おめでとう。君は創造魔法の知識を手に入れることができた。これでケガも治るよ」

「だけど夢月草なんて持ってないよ」

「夢月草はそこまで珍しい素材じゃないからね。森の中で見つけることができるよ。それと」

アコロンは机の引き出しの中にある指輪を僕に渡す。

「これは『ダールの指輪』。太古に栄えたダール文明のマジックアイテムだよ。別の空間に素材を収納できて、外に出すことなく創造魔法に使える。はめてみなよ」

「うん……」

僕は銀色に輝くダールの指輪を右手の人差し指にはめた。

「あ……」

別の空間に『魔石』が十個入ってる。これは……魔法の武器や防具を作るのに必要な素材か。それに新しい魔法を創造する時にも使える。

「その魔石はためしに入れてみたものだよ。レア素材だけど、使っていいよ。残留思念で、この場所から出ることができない僕には必要のないものだから」

アコロンの声が暗くなった。

「創造魔法は錬金術を超える究極の魔法だ。この世界でも使えるのは僕だけ……いや、今は君も使

えるようになったね」

「そんなに大切な魔法を僕に教えてよかったの？」

「選択肢がないからね。それに異界人の君なら、なんとかなるかもしれない」

「魔王を倒せるってこと？」

「うん。でも、レア素材もなく経験もない今の君では魔王ゾルデスは倒せない。信頼できる仲間もいないし」

「そう……だよね」

「だから、君は多くの素材を集め、この世界の知識と経験を手に入れるんだ。そうすれば、君は全てを手に入れることができる。創造魔法を知った君なら、それが大げさでないことがわかるはずだ」

「創造魔法か……」

掠れた声が自分の口から漏れる。

たしかにすごい魔法だ。素材さえあれば、強力な攻撃呪文や回復呪文が使えるし、武器や防具も作れる。それだけじゃなく、食べ物や服や家具も……。

「残留思念の僕にできるのはここまでだ」

机の上の人形が腰を下ろした。

「君が僕を超える創造魔法の使い手となって、この世界を救ってくれることを期待してるよ」
その言葉に自分の肩が重くなった気がした。

◇ ◇ ◇

その後、僕はアコロンに、いろいろな情報を聞いた。

この森はアクア国の領土で東に大きな町があること。そこには人間だけではなく、エルフや獣人（じゅうじん）もいること。僕たち以外にも別の世界から転移してくる者がいること。

その情報はこれまでずっと森の中で暮らしていた僕にとって、非常に有益だった。

アコロンに何度も礼を言って、僕は隠れ家を後にした。

◇ ◇ ◇

数分歩くと、森の中には多くの素材があることに気づいた。

火属性の呪文に使う『赤炎石』。照明の呪文に使う『光ゴケ』。毒消しの薬になる『銀香草』。今まで、ただの石や草だと思っていたのに。

「あ……」

数メートル先の木の根元に夢月草が生えていることに気づいた。夢月草は回復呪文に使える素材だ。これがあれば足のケガが治せるはず。

僕は黄緑色に発光する夢月草を引き抜いた。右手にはめたダールの指輪が輝き、夢月草が別の空

間に収納される。

「これと『魔力キノコ』を組み合わせれば、回復呪文が使えるはずだ」

意識を集中させて、ケガをした右足に触れる。黄金色の光が僕の足を包む。

今まで感じていた痛みがすっと消えた。

僕はその場で足踏みをしてみた。痛みはまったく感じられない。

「こんな簡単にケガが治るのか……」

口の中が乾き、ノドが大きく動く。

創造魔法ってすごいな。素材さえあれば、全ての属性（火、水、風、土、光、闇）の魔法を本人の特性に関係なく、使うことができる。それはトップクラスの魔道師でさえ不可能なことだと、アコロンが教えてくれた。普通は一つか二つの属性の魔法しか使えないらしい。

僕は別の空間に収納していた『マグドナルド』のハンバーガーを取り出した。これは『滋養樹』の葉と『記憶石』で創造したものだ。

記憶石を使えば、今まで見て触れたことがあるものを創造するための素材のレシピを知ることができる。滋養樹の葉は、食べ物を作成する時に必要になる素材だ。この二つを組み合わせることで、僕は元の世界で食べたことがある料理を全て再現できるようになっていた。

マグドナルドのハンバーガーも『ビザール』のピザも、十六歳の誕生日に高級レストランで食べた『杉阪牛』のステーキも創造することができる。

滋養樹の木を見つけることができたのは幸運だったな。千枚以上の葉を手に入れたから、自分、

食べ物には困らない。

ふと、クラスメイトたちの顔が脳裏に浮かんだ。みんなは野草のスープや木の実、小さな果物を食べて生活している。たまに鳥や魚を獲^とれたら大騒ぎだ。

「追放前の僕なら、喜んでみんなにマグドのハンバーガーを食べさせただろうな」

今の僕はクラスメイトなんて、どうだっていい。あいつらは青臭い草でも食ってればいいんだ。だけど、由那だけは違う。由那は僕の追放に反対してくれた。それどころか、僕といっしょに学校を出ようとしてくれた。彼女だけは飢えさせたくない。

そうだ！ 由那に美味^{おい}しいものを食べさせてあげよう。たしか、クリーム系のパスタが好きだったはずだ。

そのアイデアはすごくいいものと思えた。

僕は学校のある東に向かって歩き出した。



校門の前にはヤンキーグループの四郎がいた。

四郎は僕を見ると、唇を歪^{ゆが}ませるようにして笑った。

「あれ？ まだ、生きてたんだ？」

「足のケガが治ったから」

「……へーっ。それはよかったね」

かくりと首を曲げて、四郎は僕の足を見る。

「でも、君の追放はホームルームで決まったんだ。今さら、撤回はないよ」

「そうだろうね」

「なら、何故、戻ってきたんだよ？」

「由那さんに話があるんだ」

「ああー。由那なら、もういないよ」

「いない？ どういう意味？」

「そのまんまの意味さ」

四郎は、きひひと笑って舌を出した。

「君が追放されてから、いろいろあったんだよ」

「いろいろって？」

「それは僕が説明しよう」

いつの間にか、委員長の宗一が四郎の背後に立っていた。

宗一はメガネのつるに触れながら、僕に歩み寄った。

「結論から言おう。由那は窃盗の罪で追放した」

「窃盗？ 由那さんが？」

「ああ。由那は貴重な干し肉を盗んで食べたからね。その行為は絶対にしてはいけない大罪だ。そ

「それは君も知ってるだろ？」

「だけど、由那さんがそんなことするはずないよ！」

自分の声が荒くなる。

「それはどうかな。僕たちはぎりぎりの食料を分け合って生きている。彼女が食欲に負けて干し肉に手を出したとしてもおかしくはない。目撃者もいるしね」

「目撃者って？」

「エリナと副委員長の瑞恵だよ。二人は由那が食料庫に入っていくのを見たんだ。そして、その後に干し肉がなくなっていることが発覚した。由那は犯行を否認したが、信じる者は少なかった。そしてホームルームで追放が決まったんだ」

宗一は悲しげな表情で首を左右に動かした。

「由那ってバカだよ。きひっ」

四郎が上唇を舐めた。

「追放に反対してもいいって言ってた男子が多かったのに」

「……その代わりに何を要求したんだ？」

「たいした要求じゃないさ。一週間、恋人になってくれって言っただけで」

「……」

「悪い話じゃないだろ？ たった一週間なんだからさ」

四郎は好色な笑みを浮かべる。

「それだけで追放されなくてすんだのに、ほんと頭悪いよ」

「残念だよ」

宗一が、ふっと息を吐いた。

「もし、彼女が僕を頼ってくれば、こんなことにはならなかったのに」

その言葉に僕は奥歯を強く噛んだ。

宗一も由那に『恋人になれ』って言ったんだ。その誘いを由那は断ったんだ。

かつと体が熱くなり、両手の爪が手のひらに食い込む。

由那が干し肉なんて盗むはずがない。目撃者のエリナと瑞恵がウソをついてるんだ。上位カーストグループのエリナは、男子に人気がある由那に嫉妬していた。由那がいなくなれば、もっと男子を利用できると考えたんだろう。

瑞恵は委員長の宗一が好きだから、ライバル排除のためか。

僕だけじゃなく、由那まで追放するなんて……。

その時――。

「おーっ！ 何やってるんだ？」

背後の茂みから、四人の男子が現れた。

ヤンキーグループの恭一郎と力也。剣道部の小次郎と野球部の浩二だ。恭一郎は草のつるで縛った赤茶色の鳥を手を持っていた。

「何だ、優樹か」

恭一郎はゴミでも見るような目つきで僕を見た。

「肉につられて戻ってきたのか？ 悪いがお前の分はないぞ」

「ああ。もうクラスメイトじゃないからな」

恭一郎の隣にいた小次郎が鉄の棒の先端を僕に向ける。

「この鳥は俺たちが獲った貴重な食料だ。森の中を何時間も歩き回ってな」

「そーそー」と浩二が同意する。

「役立たずの追放者くんには骨もあげられないよ」

「そうだな。骨も野草のスープに入れば味がよくなる」

「さすがだな」

宗一が浩二たちを見回し、満足げにうなずいた。

「運動能力のある君たちを組ませてよかったよ。おかげで今夜は久しぶりに新鮮な肉が食える」

「俺たちの分は多めに頼むぞ。委員長」

恭一郎が宗一の肩を叩く。

「わかってる。役に立った者は多くの報酬を得ることができるルールだからな」

「やったぜ。ゴブリンの群れから逃げ回ったかいはあるな」

浩二がぐっとこぶしを握る。

「さて……と」

宗一は視線を僕に戻した。

「優樹。君は追放者だ。学校の敷地に入りたいのなら、代価を支払ってもらおうか」

「代価って……」

「何かの食べ物でいい。木の実十個か食べられる草を一束。それを渡してくれば、学校への滞在を一日許可しよう」

「……もし、肉を持ってきたら？」

「ははっ。それなら一ヶ月の滞在を認めるよ」

宗一はメガネの奥の目を細めた。

「君が食べ物を手に入れることを祈ってるよ」

「……わかった。今度、学校に来る時は食べ物を持ってくるようにするよ」

僕は暗く低い声で言った。



「早く由那さんを見つけないと」

僕は視線を左右に動かして、薄暗い森の中を見回した。

もうすぐ日が暮れる。夜になったら捜しにくくなるし、モンスター動きも活発になる。ダールの指輪に視線を向けると、収納された素材のデータがゲームのように表示された。

【魔石×10】（レア素材）
 【魔力キノコ×28】
 【滋養樹の葉×1108】
 【記憶石×45】
 【夢月草×3】
 【虹水晶×1】（レア素材）
 【赤炎石×18】
 【蒼冷石×2】
 【変化の土×48】
 【光ゴケ×25】
 【黒百合の花びら×72】
 【銀香草×34】
 【スライムの欠片×2】
 【黄金蜘蛛の糸×12】
 【眠り草×8】
 【パルク草×50……】
 e t c . ……

魔力キノコと光ゴケ、黄金蜘蛛の糸を組み合わせれば、『トレース』の呪文を使用できるか。
 トレースは過去に触れた相手のいる位置を探る呪文だ。由那とは小学生の頃、手をつないで登校していた時期があった。
 僕は素材を組み合わせて、トレースの呪文を発動する。直径十センチほどの光球が現れた。光球はふわふわと僕の周囲を漂った後、南に向かって進み始めた。
 「よし！ 上手くいったぞ。これで由那さんを見つけられる」
 ぐつとこぶしを握り締め、僕は光球の後を追って歩き出した。



光球は薄暗い森の中を進み、崖下の洞窟の中に入っていた。
 「この洞窟は……」
 光る石が均等に配置されている。足元も平らなところが多いし、誰かが使っているのか？
 僕は足音を立てないようにして奥に進む。
 十数分後、開けた場所に出た。そこは教室ぐらいの広さで、壁際の棚に多くのビンが並んでいた。
 ビンは液体で満たされ、何かの生物の脳や臓器が中に入っていた。
 「何だ？ この部屋は……」
 全身の血が一気に冷えた。

まさか、由那も……。

一瞬、最悪の予想をしたが、光球は柵のビンに近づくことなく、奥にある扉の前で止まった。溜めていた息を吐き出し、僕は扉に近づく。かんぬきを外して扉を開けると、狭い部屋の中に由那が倒れていた。

「由那さんっ！」

由那の肩を何度も揺すっていると、彼女のまぶたが薄く開いた。

「……あ……優樹くん？」

由那はゆっくりと上半身を起こす。

「私……男の人に捕まって……」

「男の人？」

「うん。痩せたお爺ちゃんみたいな。それで何か注射されて……」

由那は白い右腕を僕に見せた。肘の部分に注射の痕が残っている。

「大丈夫なの？」

「う、うん。痛みもないし」

「そっか。よかった。とにかく、ここから出て……」

その時――。

電気に触れたような衝撃が僕の体を走った。

「があっ……」

僕は苦痛に顔を歪めて倒れ込んだ。

これは……雷系の呪文か。

視線を動かすと、目の前に黒いローブを着た男が立っていた。男は骨に皮膚だけが張りついたように痩せていて、額に黒い角が生えていた。

人間……じゃない。人型のモンスターか。

動こうとしたが、手足がしびれて上半身を起こすこともできない。

「バカな男だ」

青黒い男の唇が動いた。

「女を助けに来たようだが、魔法も使えぬ異界人に何ができる」

「ゆ……由那さんに何を……した？」

「お前には理解できぬことよ」

男は枯れ木のような手で由那を掴み、彼女の目を見つめる。

「……ふむ。上手く混じってきたな。これなら成功するだろう」

「何が……成功なんだ？」

僕はしびれた唇を動かして、男に質問した。

「この女がモンスター化するということだ」

「モン……スター？」

「そうだ。女には特別に調合した秘薬を注射した。『水晶龍の牙』に『夢妖精の心臓』、そして『サ

キュバスの血』を混ぜた極上の秘薬をな」

「何で……そんなこと」

「強き生物を生み出し、我、ジェグダの奴隷とするためだ」

男——ジェグダは、背後から由那の左胸をわし掴みにした。

「この女は器量もいい。戦い以外にも使えそうだな」

「やっ……止めろ」

「無駄だ。お前は当分動けない。魔法耐性のない異界人だからな。カカカツ」

ジェグダは笑いながら、右手を僕に向ける。

「お前の死体は、ちゃんと役立ててやる。安心して死ね！」

その瞬間——。

僕の思考が加速した。

持つてる素材……魔石でレシピを作り、魔力キノコ、虹水晶、光ゴケを組み合わせる。これで僕が考えた呪文を創造する。イメージはレーザー光線だ。光を増幅させて一点に集中させる。

僕は人差し指をジェグダの胸に向けた。指先が輝き、青白い光線がジェグダの胸を貫いた。

「ぐあっ……」

ジェグダは両目と口を大きく開いて、由那から離れた。

「なっ、何故、異界人のお前が……こんな強力な……魔法を無詠唱で……」

ジェグダは青紫色の血を噴き出し、そのまま前のめりに倒れた。

僕はしびれている手を動かして、上半身を起こした。

ジェグダは倒れたまま、ぴくりとも動かない。

僕が殺したのか……。

一瞬、心臓が締めつけられるような痛みを感じた。

いや、殺さなければ僕が殺されていた。ここは平和な日本じゃない。死が身近にある危険な異世界なんだ。

何度も深呼吸をして、心を落ち着かせる。

「由那さん。大丈夫？」

僕は呆然^{ぼうぜん}としている由那に声をかけた。

「……」

由那は僕の問いかけに反応せず、ぐらりと横倒しになった。

「由那さんっ！」

僕はしびれた足を引きずりながら、彼女に近づく。倒れた由那の呼吸が安定してるのを確認して、ふっと息を吐いた。

命に別状はなさそうだ。問題は注射された秘薬か。ジェグダが『混じった』みたいな言い方をしていたけど、外見に変化は今のところない。

でも、このままじゃまずいだろうな。混じった秘薬を体から取り除く呪文を使うには……レア素材以上のスペシャルレア素材『幻魔^{げんま}の化石』が必要か。見つけるのに時間がかかりそうだ。

とりあえず、由那さんを休ませる場所を見つけよう。

◇ ◇ ◇

洞窟の中の別の小部屋に由那さんを寝かせた後、僕は隅に置かれた大きな木箱を開けた。その中には、いくつものレア素材が入っていた。

【スライムクイーンの欠片×2】（レア素材）

【ユニコーンの角×1】（レア素材）

【戦天使の羽×3】（レア素材）

【時空鉱×6】（レア素材）

【世界樹のしずく×1】（レア素材）

【地龍のウロコ×5】（レア素材）

【魔龍のウロコ×3】（レア素材）

「悪くないな」

スライムクイーンの欠片は強い防具を創るのに役立つ。時空鉱は転移の呪文に使える。他にも素材が入ってるし、これで創造魔法でやれることが格段に増えたぞ。まずは武器と防具を作って……。

さっきのダメージが残っていたのか、いつの間にか僕の意識はなくなっていた。

◇ ◇ ◇

どのぐらい時間が経ったのか。腹部に重さを感じて、僕はまぶたを開いた。

「え……？」

一瞬、僕は状況が理解できなかった。

「ど……どうして？」

由那が僕に馬乗りになって、妖しい笑みを浮かべていた。

「優樹くん……」

普段とは違う甘い声が由那の半開きの唇から漏れた。

「どっ、どうしたの？」

僕は自分に馬乗りになってる由那を見上げる。由那の瞳は潤んでいて、荒い吐息が聞こえてくる。

「もしかして、調子悪いの？ 顔が少し赤いような……」

「うん。大丈夫だよ。体は熱いけど」

由那は白いシャツのボタンを外す。きめ細かい胸元の肌と白い下着が見えた。

「ゆっ、由那さん!? 何をしてるの？」

「何って……わかるでしょ？ 優樹くんだってもう高校生なんだから」

由那の手が僕の首筋に触れる。

「ねえ、優樹くん。私の気持ち……わかってるよね？」

「きつ、気持ち？」

「そう。ずっと前から、私が……優樹くんを好きってこと」

由那は僕の体に柔らかい胸を押しつけて、顔を近づける。

「優樹くんは、私のことキライ？」

由那の唇から、甘い声が漏れる。

「いや、そんなことないけど……」

「それなら、二人で気持ちよくなる」

「由那さん……」

僕は由那の瞳孔が猫のように細くなっていることに気づいた。

これ……モンスター化の影響か？

たしか、ジェグダがサキュバスの血を秘薬に混ぜたと言っていた。そのせいか。

とにかく、由那さんを正気に戻さないで。

魔力キノコと銀香草を使って、状態異常を治す呪文を創造する！

青白い光が由那の体を包み、彼女の動きが止まった。

「……」

「由那……さん？」

「あ……」

由那の瞳が元に戻った。

「私……何を……あ……」

みるみる由那の顔が真っ赤になる。

「わっ……わわっ」

由那は慌てて僕から離れた。

「ちっ、違うの。私……眠ってる優樹くんを見てたら、変な気持ちになっちゃって」

「変な気持ち？」

「あ……う……」

「いつ、いや。事情はわかってるから」

僕は立ち上がって、由那に近づく。

「由那さんの体のことだけど、少し待ってて。治せる可能性があるから」

「治せる？」

由那はまぶたをぱちぱちと動かす。

「それって、どういうこと？」

「実は……」

僕は創造魔法が使えるようになったことを由那に話した。

「……だから、『幻魔の化石』を手に入れることができれば、由那さんは元の体に戻るよ」

「そう……なんだ」

由那は桜色の唇だけを動かした。

「ただ、珍しい素材だから、見つけるのに時間がかかるかもしれない。それでも、必ず見つけるから！」

「……ありがとう。優樹くん」

由那は僕に頭を下げた。

「気にしないでいいよ。由那さんは幼馴染みでクラスメイトだし、助けるのは当然だからね」
そう言って、僕は由那に笑顔を向ける。

「……由那さん。みんなのところに戻りたい？」

僕は由那に質問した。

「もし、由那さんが望むのなら、なんとかなると思う。今の僕なら、食料を簡単に手に入れられるから」

「……ううん」

由那は首を左右に振った。

「みんなは私が干し肉を盗んだと思ってるし。それに男子がいるから」

「男子？」

「うん。さっきみたいなことになったらイヤだし」

由那は頬を赤くする。

「あ……そっか。それはイヤだよ」

「だっ、だけど、優樹くんならいいの」

「え？ いいの？」

「……うん。だから、みんなとじゃなくて、優樹くんといっしょにいたい。ダメ……かな？」

「あ、いや。ダメじゃないけど」

自分の顔が熱くなっているのがわかる。

「……じゃあ、いっしょに……暮らそうか」

「うんっ！」

由那が大きくうなずいた。

「でも、この洞窟は薄暗くて、太陽も見えないし住みにくそうだね」

「住む場所は別のところに作ろう。創造魔法でね」

「えっ？ 作る？」

「うん。創造魔法を使えば、家を建てることもできるから」



次の日の夕刻、僕は一人で学校に向かった。

校門の前にはアニメ好きの秋原拓也^{あきはら}が見張りに立っていた。拓也は身長が百七十センチの僕より

も五センチ低く、華奢な体格をしている。学生服のズボンの一部は破れていて、白いシャツは汚れていた。

「あれ？ どうしたの？」

拓也は尖った石で作った槍を持って、僕に近づいた。

「図書館で調べ物をしたくてさ」

「でも、君は追放されてるよね？」

「食料を持ってくれば学校に入れてくれるって、委員長が言ってたんだ」

「食料を持ってるの？」

「うん。たいしたものじゃないけど」

僕は持っていた麻袋を拓也に見せる。

「……ふーん。なら、通っていいよ」

「どうも」と言つて、僕は校門から学校の敷地に入った。



三階にある二年A組の教室には、拓也を除く十七名のクラスメイトたちが集まっていた。

「おやおや。また、君に会えるとは思わなかったよ」

委員長の宗一が白い歯を見せて、僕に歩み寄った。

「ここに来たつてことは、食料を持ってきたつてことだね？」

「うん。人数分はあると思うよ」

「ああ。木の実かイチゴあたりか」

宗一は僕が手にしている麻袋を見る。

「まあ、いい。約束は守ろうじゃないか。君が食料を渡してくれれば、学校への滞在を期間限定で認めよう」

「で、持ってきた食料は木の実か？」

野球部の浩二が僕に声をかけた。

「その前に話したいことがあるんだ」

「話したいこと？」

「……うん」

僕は教壇の上から元クラスメイトたちを見回す。

「君たちは僕と由那さんを追放した」

「おいおい。今さら文句かよ」

そう言つて浩二が大げさに肩をすくめる。

「お前も由那も多数決で追放が決まったんだ。平等でわかりやすいルールじゃないか」

「でも、それでいいの？ ここは危険な異世界なんだ。みんなで協力して生きていくべきじゃないかな？」

「協力……ねえ」

浩二は腕を組んで首を傾ける。

「うん。戦闘が得意な人もいれば、食料集めが得意な人もいる。みんなが自分の得意なことで仲間を助けていくことが大事だと思う」

「たしかにそうだ」

宗一が僕の言葉に同意した。

「仲間と協力することは正しい。しかし、君は仲間じゃない。ただの寄生虫だよ」

「……寄生虫？」

「ああ。君は戦闘で役立つわけでもなく、食料集めの実績もいまいちだった。しかも、当時はケガもしてたからね。まさに寄生虫じゃないか」

「役に立たない者は仲間じゃないってこと？」

「そうだな。君は仲間じゃない」

「委員長の言う通りよ！」

副委員長の瑞恵がイスから立ち上がった。

「あなたも由那も私たちの仲間じゃないから。もう、赤の他人よ」

他のクラスメイトたちも首を縦に振る。

「だよなーっ！ 優樹がいなくても別に困らないし」

「っ！ か、お前はお前で好きに生きればいいだろう？ 森の中は広いんだからさ」

「役立たずのお前に食わせる野草サラダはねえ！ もちろん、肉もやらねえ」

「ほんと、恥ずかしいよね。人に頼ろうとばかりして」

「うじうじと文句言いやがつて。恥ずかしい男だな」

「そのへんでいいだろう」

宗一が胸元で両手を叩いた。

「まあ、これからはビジネスライクにつき合っていこうじゃないか。君が食料を持ってくるのなら、学校内の施設の利用も許可するよ」

「ビジネスライクか……」

僕は奥歯を強く噛んだ。

みんなの考えは、よくわかった。やつぱり、助けるに値しない奴らなんだな。もういい。僕は由那といっしょに生きていく。由那だけがればいい。

「さて、優樹」

宗一が視線を麻袋に向けた。

「そろそろ食料を渡してもらおうかな。それが学校に入る条件だからね」

「……わかったよ」

僕は麻袋に手を入れた。

既にレシピはわかっている。滋養樹の葉を一枚使って……ついでにパルク草で包装も完璧に再現するか。

手の中に温かさを感じられるハンバーガーが具現化された。
「これでいいかな」

僕は麻袋からハンバーガーを取り出し、教卓の上に置いた。

「んっ？ これは何だ？」

「マグドナルドのハンバーガー、ビッグマグドさ。食べたことあるだろう？」

僕は包装紙を指先で開く。高さ十センチのハンバーガーが姿を現した。

柔らかそうなキツネ色のパンに二枚のパティ、チーズとピクルスとレタスが挟んであるのがかかる。
肉とパンの香りが周囲に漂った。

「えーと……この教室にいるのが十七人で、見張りに立ってるのが一人か。つてことは十八個だね」

僕は麻袋の中から、次々と具現化したハンバーガーを取り出し、教卓の上に置いた。

「出来たてだから、早めに食べたほうがいいと思うよ」

「……ああっ？」

宗一の口から驚きの声が漏れ、みんなの目が極限まで開いた。

「そ……そんなバカな」

宗一はハンバーガーを手に取り、それを鼻に近づける。

「これは……幻覚か」

「そう思うのなら、食べてみたら」

「……」

宗一は無言でハンバーガーにかぶりついた。頬を大きく膨らませて、口を動かす。

「……んむっ……むっ……」

十数秒の沈黙の後――。

宗一の目から涙が流れ落ちた。

「……これは……ビッグマグドだ」

「お、俺にも食わせろ！」

ヤンキーグループの力也がハンバーガーを手を取った。

他のクラスメイトたちも教壇に殺到して、ハンバーガーに手を伸ばす。

「こっ、この匂いは……マジモンじゃねえか！ ピクルスも入ってやがる」

「うっ、ウソっ!? どうしてビッグマグドが？」

「そんなこと、どうだっていいっ！」

クラスメイトたちは大きく口を開けて、ハンバーガーを食べ始めた。普段はクールで感情を見せない上位カーストグループの霧人も、出来たてのハンバーガーを口に押しつけている。

「ああっ……これよ。夢にまで見たビッグマグドの味」

料理研究会に入っている甘枝胡桃が歓喜の涙を流した。

「牛百パーセントのお肉に新鮮なレタス。それを包む柔らかなパン。これは神の食べ物だわ」

「あ、ああ。こんなにビッグマグドが美味^{うまい}かったなんて」
浩二が小刻みに体を震わせる。

「体中にハンバーガーの栄養が染^しみ込んでいくぞ」

他のクラスメイトたちも次々と感想を口にした。

「神様、ありがとう。私にビッグマグドを食べさせてくれて」

「こっ、これは犯罪的な美味さだよ。いや、犯罪そのものだ!」

「犯罪? 正義だろ! ビッグマグドは正義だよ」

クリームイエローのソースを口につけ、クラスメイトたちは瞳を輝かせる。

やっぱり、こうなるよな。

僕はクラスメイトたちの狂騒を見て、ふっと息を吐いた。この世界に転移してから食べた物って、草や木の実、果物がほとんどだ。たまに鳥の肉を食べられたけど、味付けは塩だけだったからな。

食堂に残ってた調味料も塩以外はなくなっちゃったし、ビッグマグドの濃厚で胃袋に響く美味さに匹敵する食べ物なんて口にできなかった。

「優樹……」

ハンバーガーを食べ終わった宗一が僕の肩を掴んだ。

「これはどういうことだ?」

「どうということって?」

「ビッグマグドをどこで手に入れた? まさか、この世界にマグドナルドがあるのか?」

「ないと思うよ。だけど、ビッグマグドを手に入れられる方法はあるんだ」
僕は教卓の上で丁寧^{ていねい}に麻袋をたたむ。

「で、委員長。たしか、肉を持ってきたら、一ヶ月、学校にいていいんだよね?」

「……あ、ああ。そつ、そうだな」

宗一の頬がびくびくと痙攣^{けいれん}した。

「たしかにビッグマグドには肉が入っているし、品質も問題ない」

「じゃあ、図書館を使わせてもらおうよ。いろいろ調べたいことがあるし」

「おいつ、優樹!」

浩二が僕に駆け寄った。

「ビッグマグドって、まだあるのか?」

「今はないよ」

「今は? 今はってことは、また手に入れることができるんだな?」

「……まあね」

僕の言葉にクラスメイトたちの瞳が輝く。

「マジかよ! ビッグマグドがまた食えるぞ!」

「うおおおっ! やったぞ。これで食いもんにも困ることはねえ」

「ああ。ビッグマグドは野菜も入ってるから、栄養バランスも最高だぜ!」

「よかった。本当によかった」

「とりあえず、明日の朝食もビッグマグドにしようぜ」
「何言ってるの？」

僕は普段より低い声を出した。

「僕、夜には学校から出て行くよ」

「え……？」

浩二がぼかんと口を開いた。

「……いつ、いや。でも、お前、一ヶ月間、学校に滞在できるんだろ？」

「うん。でも、出て行くのも自由だよな？」

「そ……それは、そうだけど……どこに行く気なんだ？」

「近くに家を建てようと思つて」

僕は窓から見える丘を指さす。

「あの辺りなら学校へも通いやすいし、ちょうどいいかな」

「いや、学校にいればいいじゃないか。校舎は頑丈だし、ここならみんないるからモンスターが襲ってくることもねえし」

「いや、それは悪いよ。僕はクラスメイトじゃないし」

「クラスメイトじゃない？」

「うん。五日前に追放されちゃったから」

「あ……」

みんなの顔が強張った。

「安心していいよ。みんなには頼らないようにするから」

僕はにつこりと笑つて、クラスメイトたちを見回す。

「食料はこの通りなんとなかなりそうだからね。これ以上、寄生虫なんて言われたくないし」

「あ、いつ、いや」

僕を『寄生虫』よばわりした宗一が口をばくばくと動かした。

「それは、あくまでも君がケガをしていたからであつて、今の君は……違うかもしれないな」

「……そう。少しは評価が上がったみたいで嬉しいよ」

「少しじゃねえって！」

浩二が貼りつけたような笑顔で僕に歩み寄った。

「なんせ、ビッグマグドだからな。俺たちが獲ってきた鳥よりも百倍は美味しい食い物だし」

「それはよかった。これで君から『役立たずの追放者くん』って言われなくなるかな」

「あ……ああ。もちろんさ」

浩二の額に汗が浮かんだ。

「ちよつと！ 優樹くん」

瑞恵が僕を鋭い目でにらんだ。

「まさか、自分だけ、ビッグマグドを食べる気なの？」

「ダメかな？」